

## 島の魅力発掘をなりわいに

いえしまコンシエルジュ／インターン 中西和也

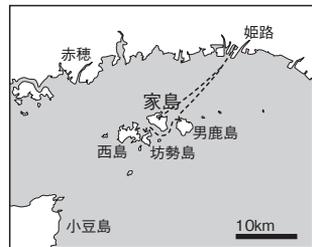
## 「いえしまコンシエルジュ」養成講座を機に移住を決意

大阪から家島に越してきて今年の春で七年目になります。リュックサックひとつを背負って移住した私も、妻に子ども二人、マイカー、マイホーム、さらにはゲストハウスまでを持つようになりました。現在、いえしまコンシエルジュ（観光や産業振興の企画立案と実践者）として、観光ガイドをベースに楽しく暮らしていますが、振り返ってみると、島の人はよく私を受け入れてくれたなと思います。

私は大学で建築を学び、当初は著名な建築家による建築物やその建築哲学に心酔していましたが、次第に建築の周りにある「まち」というものに興味が移っていききました。ゼミの調査では、農村や離島を訪れ、その地域の人たちと

酒を飲みながら語らうことに楽しさを感じていましたが、具体的な仕事はイメージできていませんでした。向こう見ずな性格なので、就職活動をすることもなく大学を卒業、コンビニでアルバイトをしながら体裁を保つために建築士の資格を取得したり、一度は就職したものの辞めてしまったりと、ふらふらしていました。それが、運良く都市計画系のシンクタンクに勤めることができました。それはまさに大学時代から切望していた「まちに関わる仕事」だったため、やりがいを感じながら充実した日々を送っていました。

そんな折、知人から家島での活発なまちづくり活動についての話を聞き、「いえしまコンシエルジュ養成講座」の開催を知りました。これこそ、まちづくりの現場に関わり、自分がスキルアップできるチャンスだと思い、参加を決め



家島群島：姫路市の南西18kmにある面積5.45km<sup>2</sup>、周囲15.4kmの家島を中心とする島々。人口は計5,330人(平成29年3月現在)。海岸線が変化に富み、天然の良港となっている。古くから国生みの島「オノゴロ島」と伝えられる。漁業と石材業が主産業。



港でwelcomeボードを掲げてお迎えする筆者。

ました。講座の目的は、外国人観光客も多く訪れる姫路城から少し足を伸ばして島を訪れてもらうために、島の空き家を観光の拠点として活用し、島の魅力を発信・コーディネートできる人材を養成しようというもので、二〇〇九年度に開かれました。同年の秋に初めて訪れた家島は、これまで私が訪れた離島とは異なる雰囲気を持っていました。採石・海運業という他の島にはない基幹産業に支えられてきたことがその理由だと、島に何度か通って分かりました。講座を主催した「特定非営利活動法人いえしま」(以下、NPOいえしま)は、島で漁業や採石業、海運業を営む家庭の主婦たちが、二〇〇六年の家島町と姫路市との合併を契

機に「このままでは家島が立ちいなくなってしまう」との危機感から立ち上げた団体で、特産品開発などに取り組んでいます。

講座の終了後、希望者たちで自主的に継続して活動していくことが決まり、私自身もまちづくりの現場での活動の楽しさ、島の人たちとの交流、魚の美味しさなどを知り、週末を利用して通うようになりました。そして、家島の魅力や可能性をさらに強く感じることで、「人口減少社会における地域活動のモデルケースになりたい」「都市部ではできない働き方、暮らしのあり方にチャレンジしてみたい」という気持ちが芽生え、二〇一一年三月に移住しました。

### 島の不思議を記録し、起業に生かす

移住に際して、NPOいえしまのおばちゃんたちに相談しましたが、彼女たちからは「家島のために何かをしたい」という気持ちはわかるけど、仕事もない。大阪で働いていた方がええと思うで」と、一度は断られました。

しかし、私はすでに働いていた会社を辞めていたので引くわけにはいきません。なんとかお願いすると、「じゃあ、働かないわけには生きていかれへんからアルバイトし。住むところはとりあえず事務所の空いている部屋使ったら」と言われ、島の暮らしが始まりました。今思えば、島のおばちゃんたちも養成講座を実施したものの、本当に移住者が

現れるとは思っていなかったのだと思います。

紹介されたアルバイト先は漁師が営む民宿でした。船に乗って漁に出ることも、お店で接客することもありました。この仕事を通して、家島の海のことや魚のことを詳しく知ることができました。さらには、魚をさばけるようになることができました。これは魚を丸ごと一匹おすそ分けしてもらえぬ島で生きていく上で欠かせないスキルです。

実際に島で暮らしてみると、大阪から通っていた時には目に入らなかった多くの不思議なことに気づくようになりました。例えば、ある駐輪場のフェンスには大量の洗濯バサミがついています。これは、近くのおばちゃんの家が干すよりも日当たりがよいので毎日ここに洗濯物を干しにくるためです。こういった島の不思議を探し、記録していきましました。

民宿でのアルバイトは思いのほか楽しく、特に不自由なく暮らしていました。しかし、「自分はアルバイトをしに来たわけではない」という思いは持っていました。ある日、お客さんから「小豆島でガイドやカヌーのツアーの事業をしている団体がある」と教えられ、行ってみることにしました。ツアーに参加し、「このやり方なら家島でもできる」と感じ、これまでに記録した島の不思議なことや、都会とは異なっているところを紹介していく、いえしまガイドを始めました。

何度か、知り合いに来てもらいたいテストと改善を繰り返し、移住から一年後の二〇一二年三月に、自分でホームページを作成して本格的なガイドをスタートさせました。

### 少しずつ拡大する事業

いえしまコンシェルジュは、現在、以下のことに取り組みままでにになりました。

#### ①ガイド事業

いえしまガイドを始めた当初は、NPO いえしまの取り組みを知って家島に興味をもった情報感度の高い個人旅行者の利用がほとんどでした。取り組みを続けていくうちに、リースクールや学童保育などの団体の依頼も少しずつ増え、現在では旅行会社からの依頼も多数受けています。年間約二五〇〇名を案内しています。

家島は決して観光地ではなく、わかりやすい観光スポットもありません。しかし、都会との暮らし方の違いを紹介することで、観光に値する価値を利用者に提供することができていると自負しています。

#### ②特産品の製造

二〇一四年より島内外の若者一〇名と、家島ふるさとづくり青年隊を組織して島の将来について考え、活動しています。島の名刺代わりの「いえしまてぬぐい」や海老だし調味料「いえしまかけるえび」を企画・製造し、島内の

お土産売り場で販売しています。

### ③島外への魚の定期販売

「家島ふるさとづくり青年隊」の取り組みのひとつとして、奈良のニュータウンと提携し、島の魚を定期的に発送しています。この取り組みは新鮮な魚が手に入りやすく、高齢単身世帯が増え、コミュニティが希薄化しているニュータウンのカフェに、島の魚を発送し、配分してもらおうことで、コミュニティの再構築を図る狙いがあります。また定期的に相互の地域を訪れ、交流することで地域のファンを増やす意図もあります。

### ④島内の魚や加工品の卸売

家島諸島内の漁業協同組合や水産加工会社と連携して、東京や大阪、姫路の飲食店などに鮮魚や特産品を販売しています。島の認知度向上のために、都会の消費者に対して家島との接点を少しでも多く持つてもらいたいという思いです。

### ⑤男鹿島の空き家改修

平成二六年、男鹿島で空き家になっていた民宿を活用できないかとの相談を受け、大阪での建築士仲間を中心にゲストハウスとして活用するために、改修をすすめました。改修には延べ二五〇名が参加。一年を一区切りとして島の人たちを招いてお披露目会を実施することで、活動に対して島の人たちの理解と協力を得るよう努めました。現在も

メンバーと手作業で改修を続けながら、ゲストハウス「うみのいえ」として運用を図っています。昨年はメンバー内の夫婦が、この施設と目の前のビーチを使って結婚パーティを実施。人口三〇人の島に八〇名以上が訪れるという一大イベントになりました。



男鹿島にある「うみのいえ」の前で、島の人を招いて改修後のお披露目会。

## ◎第2、第3の「なかちゃん」に来てほしい

平成元年当時、家島の主産業である石材・海運業に陰りが見えてきたころ、旧家島町では新たな産業＝観光振興施策を実施しましたが、住民の意識は石材・海運業で繁栄してきたという思いが根強く消極的でした。しかしながら、平成14年をピークに関西国際空港をはじめ大型公共事業が終了したことにより、税収が年々減少をたどり、石材・海運業の打撃から新たな産業の模索が始まりました。

平成15年ごろ、これら家島の主産業が低迷するなか、当時大阪芸術大学の学生だった西上ありささん（現studio-L所属）が卒業課題研究のために偶来島したことがきっかけで、大学生と家島の女性や若者との交流が始まりました。

そして、平成18年の姫路市との合併を機に地域住民も、合併後はきめ細やかな行政サービスは望めない、自分たちでこの島を何とかしなければという思いが強くなり、それが「特定非営利活動法人いえしま」（以下、NPOいえしま）の設立や地域ボランティア団体の活動へとつながっていきました。

島のオバちゃんたちが中心となって設立されたNPOいえしまは、特産品の開発や地域情報誌の発行、さらに平成20年からは生活体験型観光をコーディネートできる人材（いえしまコンシェルジュ）の育成事業に取り組みました。この事業に応募したのが中西君でした。

中西君はその風貌（丸い顔のメガネの奥のちっこい目）と人懐っこい笑顔により、地域の子どもからお年寄りにまで「なかちゃん」と慕われ、家島に定住するとともに家島神社（延喜式名神大社）で初めて宮司の立ち会いのもと結婚式をあげ、現



島内外の人で賑わう家島の特産品を使った  
グルメイベント「いえしまーけっと」。

在では奥さん、子どもさんとともにすっかり島に馴染んでいます。

いえしまコンシェルジュとして観光案内（私たち地元住民が気づかない観光スポットの紹介）はもとより、平成22年に地元観光事業組合やNPO、ボランティア団体らの連携と情報交換のため立ち上げた家島観光まちづくり協議会のコーディネーターとして活躍、それが同25年からのグルメイベント「いえしまーけっと」の開催、成功に結びつきました。

住民の危機感がもたらした地域活性化に向けた取り組みは、家島の自然の素晴らしさとオバちゃんたちの熱い人情によって大学生たちを魅了することからスタートしましたが、未だ道半ばであり、今後は空き家情報の提供や定期航路運賃の助成（島に人を呼び込むには高い船賃が最大のネック）など、行政のさらなる支援が必要です。

姫路市においてもようやく昨年からは地域おこし協力隊員を募集し、家島に配置しました。これを契機に第2、第3の「なかちゃん」が島に定住し、地域住民とともに離島で過疎化が進む家島を魅力ある島に再生できるよう希望します。

（前姫路市家島事務所 副所長 橋本善博）

気軽に島暮らしをはじめられる仕組みづくりを

島の人たちはもちろん、毎年島を訪れるリピーターや遠くから応援してくれる島のファン、そして一緒に活動してくれているメンバーなど、協力が島外にも増えてきました。

しかし、まだまだ家島の認知度は高くありません。また、残念ながら島の人口減少が止まることもありません。

これまで観光という切り口でさまざまな取り組みを行ってきましたが、これからはさらに一歩すすめて、実際に島の暮らしを始める人たちの増やしていきたいと企画しています。

まずは、姫路港から三〇分、大阪から三時間という利便性の高さを生かして、都市と島とを行き来し生活する二地域居住や週末起業など、島外者が定期的に島と関わるための仕組みづくりをすすめています。



島の将来について考え、取り組む仲間たち。

中西和也（なかにし かずや）

1985年生まれ。大阪市出身、熊本県立大学卒。長崎の離島や熊本の中山間地域における調査に随行するうちに「まちづくり」に興味を持つ。酒を酌み交わしながら漁師のおっちゃんに言われた「人生は他人よりちょっとだけ頑張ったらええんやでー」という言葉が妙に心に残り、以後、地域の人たちと酒を飲みながら話すことが最大の楽しみになる。2011年に家島に移住。